

「イクケン香川」子育てでカレッジ

子育て支援者スキルアップ学科



日時 ● 6月20日(水) 9:30~16:00

会場 ● 香川県青年センター大ホール (高松市国分寺町国分1009)

9:30~12:00 「Triple P-前向き子育てプログラム」

講師：鈴木裕美さん

12:00~13:00 ランチ交流会

13:00~16:00 CAP プログラム勉強会

講師：おかやま CAP

参加者数：第一部 27名、第二部 25名、第三部 30名

【第一部 「Triple P-前向き子育てプログラム」】

香川大学医学部衛生学小児科医 NPO 法人親の育ちサポートかがわ理事 鈴木裕美さん

※Triple P とは、世界 25 カ国で実施されている親子向けの子育て支援プログラム。

プログラムを通じて、家庭、学校、地域社会における子どもの行動・情緒問題の予防と子どもがのびのび育つための家庭環境づくりを学ぶものです。

子育てプログラムが必要な香川県の子育て事情

2015年、高松市保育所に通園する3,500名の児童の保護者を対象にアンケートを実施。そのうち約1,900家庭から回収・集計したところ「2割弱の子どもが早急に対処すべき問題行動を示して」おり、「7~8割の保護者が不適切な育児をしている」という結果が出た。「不適切な育児」とは、暴言・手が出る・イライラ・ガミガミが止まらないなどを指すが、これらの保護者の不適切なかわりを子育てプログラムを通して是正すると、子どもの問題行動を減少させる可能性があることが過去の多くの研究で分かっているようだ。



安定した愛着(アタッチメント)

・愛着は、人格のもっとも土台の部分形成するもの・特別な人との絆であり、子ども自体に愛着をいかに築くかが、その後の人生に大きな影響を与える。愛着は、子どもと養育者の間で造るものである。

・安定した愛着を育てることは非認知能力を伸ばすことにつながり、子どもの夢を実現する原動力になる。「安定した愛着」の築き方は子育てプログラムによって学ぶことができる。

子どもに必要な3つのこととは？

・「愛情(愛してほしい)」「関心(見てほしい)」「前向きな注目(認めてほしい)」の3つ。「愛情」と「前向きな注目」が子どもに十分与えられると、安心感が芽生え、そこからチャレンジや冒険をする勇気生まれる。子どもは認められて初めて、一歩を踏み出すことができる。また、「愛情」と「関心」が十分与えられると、信頼感が芽生え、他人を信じ仲間を大切にするなど安定した関係を築くことができる。

・「愛着」はいつでも再形成することができる。保護者が気づき、やり直したいと思うことが大前提であるが、それが望めない場合は、先生や子育て支援者などの大人が子どもに「愛情」「関心」「前向きな注目」の3つをたっぷり与えることで愛着を安定化することができる。

・これらの3つは子どもだけでなく、母親にも必要である。子育て支援者は母親の話をしっかり聞き、頑張りを認めることで「愛着」を築くことができ、それが「親子の愛着の築き」にもつながるので、ぜひ実践してほしい。

「前向き子育て」5原則

講演前半では、DVDで子育てのワンシーンをいくつか見た。例えば、おもちゃ売り場で「これ買って〜！」と駄々をこねられ、根負けして買ってしまふ不適切な対応を見て、自分の子育てを振り返った。

また、次の「前向き子育て」の5原則について、具体的な例を挙げながらの説明があった。

1. 安全・安心して過ごせる環境作り
2. 積極的に学べる環境作り
3. 一貫した分かりやすいしつけ
4. 現実的な期待感を持つ
5. 親としての自分を大切にする

続いて、愛着の築き方やしつけの仕方を、ロールプレイやワークを通して学んだ。



【第二部 ランチ交流会】 「それぞれのテーブルで自己紹介や情報交換の場となった。」「他団体の活動を知れた」などの声があり、「今までの研修と違った形で良かった。」という声もありました。

【第三部】CAP プログラム勉強会

講師:CAP おかやま 山下明美さん他CAPスペシャリスト

※子どもの虐待予防プログラム CAP とは、叩いたり、怒鳴ったりして教えることがなぜダメなのかを子どもの視点や感覚を体験し、子どもに対する肯定的な見方や伝え方について学ぶプログラムです。

支援者とは？

当事者の困り感にフィットすることを目指す。支援者は決めつけず、「同情」や「同感」の気持ちで聴かず、「共感」して聴ききることが大切。利用者の力を信じ、困り感を聴ききり、それに沿って伴走することが大事。まずは、子どもや保護者の人権を尊重し、自らの人権意識を育てること。保護者のエンパワメント(内にある力の活性化)のためにできることは、保護者の話を聴き、気持ちを受け止めること。気持ちや願いを肯定的に受け取ることからスタートすること。他にも虐待に気付く手がかり等、支援者としての知識も多く学んだ。



暴力・虐待は力の不均衡の中で起こる

「虐待」は力の不均衡で起こる。保護者は自らの力を使って、子どもを支配する。それが、「虐待」に繋がる。日々の中で、圧倒的な力の不均衡が発生し、子どもは力を削がれ、「無力化」「孤立化」していくと、やがてSOSが出せなくなる。

しかし、「虐待」の連鎖は防ぐことができる。虐待を受けた子どもがおとなになり、虐待の連鎖となってしまうのは3割で、7割の人は、話すことができ、信じてもらえ、日常的なケアがあれば、虐待を繰り返さない。今、虐待傾向にある人にも、話すことや日常的なケアが必要。だからこそ、支援をする側は、自らが力を持っていることを自覚し、保護者の困り感を聴こうとすることが大切。



幼児の感覚を体験しよう！

子どもの視点や感覚を体験した。利き手と違う方の手ではさみを使い、紙を切ったり、指先1cmを残して軍手をはめ、シールを貼ったり、レンズが曇った眼鏡をかけ鏡越しに見える絵をなぞることを体験した。子どもたちはこんな感覚なのかと驚いた。また、作業中に掛けられた声、「もっとちゃんと！」「早くして！」等と、「上手だね〜」「ゆっくりでいいよ」「大丈夫！」等に、声かけ一つがどんな気持ちになるのかを実感。日頃の声掛けを振り返る大きな体験となった。

エンパワメントな関わりとは…

参加者全員で、小学生向け CAP プログラムを体験した。ロールプレイと話し合いを通じて、子どもは、一人の人で「あんしん・じしん・じゆう」の権利を持っている存在だということを確認した。安心がなければ、自信も持てず、自由に行動できない。根っこに安心があることが大事。それは保護者も同じ、安心できる場を作っていきたい。

最後にした、お互いに黙ったままで、話を伝え、聴く体験では、涙ぐむ人もいて、聴こうとする・わかろうとする姿勢が人をほっとさせ、言葉にしなくても気持ちは伝わることを体感した。

語れない思いを語れる場が「ひろば」であれば、多くの人がホッと、話すことで、心の重荷をおいて行ける。そのことが、子育て支援の場としての「ひろば」の果たす役割ではないか。虐待をしてしまう保護者はひどい保護者ではなく、子ども時代に大切に關わってもらえていない人あるいは、子どもにどう關わっていいかわからない人かもしれない。責めるのではなく、その人が困り感を話せるように、自分の中にある思い込みを意識し、聴こうと心がけ、安心して話せる「ひろば」にしてほしい。



参加者アンケートより(一部抜粋)

- 具体的でわかりやすく、勉強になった。
- 子育てをする為に、最も必要なことが勉強になった。
- 定期的に勉強したい。
- 色々なお話が聞けてよかった。今まで聞いたことがなかったので、今後役に立てていきたい。
- もっと自信をもって、楽しんで子育てをしていけるような気持ちになった。
- 寄り添い方について学べた。
- 子どもに声をかけすぎているのではないのか？と思った。聴くだけでも十分支援していることになると感じた。
- 語れない気持ちを聴くワークが初めてだったので勉強になった。
- 子どもにとって安心・安全な環境を大人として作る事もできると思いました。